

「シンポジウム報告」

社畜にならず

楽しく生きたいんだけど？

「労働」の意味を

考える無気力と怒りの宴

10月18日、10・18実行委員会の主催により、標記のシンポジウムが新潟大学付属図書館ライブラリーホールで開催されました。その概略を紹介します。

(編集部)

実行委員あいさつ

昨年11月から今年の5月にかけて、学校で働く非正規教職員の声を聴く取組をした。その中で、「現場に余裕がなく、子どもと関われない」「非常勤でかけ持ち」「同一校で長く勤務できない」などの悩みを持つ非正規労働者の現状を知った。これらの現状をなんとかしたいと考え、他の3名の学生と一緒に「ありありフェスタ」との交流を図った。そして、学生の自分達が「働く」を考えること、「労働」の展望を語り始めること、「社畜」は、会社の「社畜」、つまり「雇っ

「雇われる」の関係だけに留まらない。対象を子どもにも拡大して「社会」の「社畜」としても捉えた。学校や家庭で「この人に」「この人生を」と言われて育つ。これらが反映した人間像・人間性が私たちの全てだ。もっと色んな生き方が有っていい。また、「社畜」から抜ける方法は？「自分の『社会』をひろげるには？」と、自分を軸にして生きることを考えるのだ。そして、人の価値観を知ると共に、自分のものと比べる・すりあわせることにつなげるのだ。今回のシンポジウムの趣旨は、「『社畜』にならない生き方を探る、すりあわせをしていく」ことにある。

雨宮処凛トークショー

「こんな生きづらい世の中で

私が声を張り上げるわけ

一緒に話し合った人 山本由美さん(和光大学)

(山本さんから、雨宮さんのこれまでの活動の様子・著書の紹介があった後、雨宮さんのトークが始まりました。)

中学・高校生の頃

「新潟日報」で5年間以上連載されて100回以上になった。プレカリアートの不安定な労働者が、普通に生きることの生きづらさを書いている。

2000年に『生き地獄天国』を出版。中学校時代のいじめ体験が自分の原体験。いじめられていた時期は、感情を殺して過ごすことに心がけた。高校時代には、リストカットなどの自傷行動がでてきた。いじめられていたときの自分の行動に対して、自分を責める心の問題に発展した。20代は、対人関係などで悩んだ。人生がおもうようにならずに困っていた。こんな状況の中で、「教育に対する批判」「いじめを認めないこと」を発見した。

1975年に生まれた。育った頃、学校内での「葬式ごっこ」が話題になっていた。私より1つ上の子達は、ばりばりの校内暴力の時代。それに対して先生達は体罰などで「管理」をすすめていた。こんな中、生徒は順番に、いじめのターゲットになっていた。みんながおかしくなるような雰囲気だった。高校進学を機に、中学校でいじめをしていた子と離れた。そして、人間らしい感情を取り戻し始め、自傷行為が噴出し、自分の生きづらさを代弁してくれている。ビジュアル

系バンドの音楽にはまった。おっかけをしだした。

このような私の様子を見て、親は驚いた。学校以上に管理的空間として家庭を感じていた。口うるさく言われる家庭より、たとえマイナス13度になるとしても、札幌で野宿することを選んだ。親の手に負えないので、カウンセラーに相談することとなった。担当したカウンセラーの方は、子どもの立場を理解して事をすすめる方だった。この相談の後、親は私の行動に対して受容的になった。そして、高校3年生の頃には、今までとってきた子どもへの態度について反省を口にするようになった。

卒業、フリーター、右翼団体加入

93年、18歳、人形作りに興味を持った。人形作家に弟子入りし、生活のためバイトをした。このころは、「バブル崩壊」の時期で、「就職氷河期」に入っていた。

95年は、戦後50周年。日本の繁栄が崩れ、阪神淡路大震災・サリン事件があった時期だ。物質主義の破綻、精神主義への回帰が叫ばれた。「がんばれば報われる」時代から、「がんばってもどうしようもない」時代へ。勉強してもフリーターとしての働き方しかない

現実。梯子をはずされている感じ。使い捨ての労働力として、教育にたまされたとの思い。東京に出てきて、浮遊している自分。今の社会に文句を言っている人はいないかと見渡す。

左翼の言葉は難しい。右翼は、「アメリカが悪い」と主張していた。小林よしのりの書物に触れた。バイトをしていた飲食店々主に「韓国人は、文句も言わずよく働く」と言われた。外国人と自分の比較。自分は日本人だ。どん底の生活、展望の見えない状況の中で、右翼団体に入った。自傷行為は無くなった。怒りが社会に向かった。生きることをまともに扱わない社会への反抗。

98年に小林よしのり『新ゴーマニズム宣言SPEC IAL 戦争論』が出て、影響が広がった。特攻隊にあこがれを持つ人々が現れる。現実の政治で「自虐史観」批判や「大東亜戦争肯定」の考えに沿った主張がされてきて、右翼の活動に対して覚めた思いがした。

「戦争論」にはまっている若者を映す映画が公開される時、本の出版を勧められた。『生き地獄天国』を書いた。右翼から抜けると共に、脱フリーターになった。右翼活動、抜けることが就活になった(笑い)。

プレカリアートとのつながり

25歳で右翼を辞め、本を出した。この2000年は、インターネットが盛んになり、ネットを通して「リストカット」「摂食障害」などの経験者交流がなされた。そして、2003年には、「ネット心中」が現れた。いじめ・仕事のノルマが厳しい↓うつ病↓親元に帰る↓家庭内暴力と、こじれまくって究極のどん詰まり。

親にうらみを言う、様々な問題が「親子関係」に結びつけられた。親は、高度成長時代に生きた代表として、子は、バブル崩壊で上昇の梯子を外された世代の代表として、実相と実相の代理戦争。プロレタリアートの言葉は、ピンとこなかった。

日経連は「新時代の日本の経営」で「長期蓄積能力活用型」「高度専門能力活用型」「雇用柔軟型」の3つの労働者像を提言した。その結果、労働者派遣法は「改悪」が繰り返された。最底辺のフリーターは生存すら脅かされた。「生きさせる」の叫び、生存をかけた叫びに出会ったのが、プレカリアートメーデーだった。そのメーデーで、いきなり3人が逮捕されるのを目撃した。そのことにも驚いた。こんなことってない

だろう、日本の底が抜けたような気持ちになった。

プレカリアートは、イタリアが言葉発祥の地で、このような「生きさせろ」の運動は、米国にもある。非正規労働者の割合は、日本では4割だが、韓国では6割になっている。日本円にして7万円の暮らしを強いられている。これは、資本主義の欠陥。システムの問題。親がよかれと思って、「よく学んで」、「いい学校に行つて、いい会社に入れ」、「豊かな生活がおくれる」と子どもに要求する。しかし、社会は既に変わっている。子は、親のせいにする。社会の仕組みはなかなか分らない。

つながっていくこと

ヘイトスピーチが大きな問題になっている。外国人に奪われ、私は被害者。あいつらが悪いと主張する。コンビニで買い物、パチンコで遊ぶ。本屋に行けば「嫌中」「嫌韓」の本がたくさん並んでいる。国同士の依存関係や切り離せない関係など、本当のことを知る機会がないのが現実。それは、ネットウヨでも同じ事が言える。繋がり方が違っている。直接顔を合わせてヘイトスピーチを言われると、引く人もいて、人の反

応が見える。でも、ネットでは「賛成」「反対」しかない。意図的に繋がる場が必要だ。「生きづらい」と思っていることを他人に言つたら楽になった。自殺未遂経験のある人に呼び掛けて、イベントを開いたことがある。3人集まって話し合い、意気投合。共感されたり、今までの生き方が肯定されたりした。

フリートークショー

雨宮処凛×学生×労働者

↳ 社畜にならずに楽しく

生きたいんだけど？

○最初に学生の労働者が発言

大学院生のOさん：中学の教師希望。公務員は労働環境が良いと思つかもありませんが、なかなか厳しい。社会の一員として仕事をしたい。やりがいのある仕事で、集団の中で歯車となって働きたい。

学生のーさん：教師になることはできなさそう。どんなことで働くか、労働の良いイメージを考えていきたい。

運送労働者さん：「やりがい、楽しさ」は、やりたいと思う仕事が出来ると入社に入れた、目標達成、お客さんに褒められたなど。働く仲間と良い関係を築くこと。トラック業界では規制緩和による参入がたくさんあり、業者間の競争により、低賃金など様々な問題が発生した。

東京在住の労働者さん：親や親戚の人にかわいがられて育ったが、それが束縛になった。高校中退、東京に出てきて生活。労働についてはポジティブ。

埼玉在住の学生さん：高校の時、摂食障害になって中退。原発事故が起きて、政府のことを信じられなくなった。大学に入って必死で勉強した。おもしろい勉強がたくさん出来た。4年生なのに就活していない。みんなと同じ姿、ロボットのように個性のない事に対して違和感がある。人との繋がりを広めて、むだな分断に悩まされることが無く、自分の生き方と近い労働コミュニティで過ごしたい。

学生のSさん：生きづらいことがプレッシャーになり、うつ病、3年間休学。その後復学。うつ病の経験を経て、同じ事で悩んでいる人に声を掛けることが出来るようになった。私の身の回りには、「自己責任」として悩んでいる人が多い。このような生きづらさをつくりだす社会構造とは何か、どうできるかを見付けて行きたい。

学生のKさん：働く良いイメージがない。自分の軸を考えた。

(10分休憩の後で、2009年「自由と生存のメーデー」の様子を紹介した映像鑑賞)

雨宮さんの説明：まともな働き方が出来ない人たちが、このメーデーを8回続けてきている。「ただ騒いでいるだけ」と批判されるが、非正規労働者は「なきもの」「バッシングの対象」との風潮に対して、アピールしたい気持ちを表現している。5000人を出発したが、飛び入りが加わり10000人超えに。3・11以降、反原発のデモが盛んになった。デモを続け

ないと、権利としてのデモ行動を忘れてしまう。デモのやり方も色々工夫してきた。商店街と交渉して、デモ参加者に対する割引とか、地域の人々を巻き込んだ運動にしたりとかしている。「分断」することで得をする勢力に対抗して、「連帯」を強めるために。

○Q & A 会場からの質問に答える

Q 『すさんだ業界』の実情をどうしたらいいと思うか。

A 運送労働者さん 答えは出ない。仲間を作る考え

Q 『ポジティブにしていく』とは？

A 学生のSさん つらいことと思わず、やり遂げた達成感を持つ。ハードルの高いことを経験した後では、低いハードルのことがなんなく出来ると思う。ゲーム感覚でやる。

Q 『教師になれなさそう』とは？

A 学生のIさん 貧乏な人は生きていけない社会。ひねくれた。弱い人を救えない大人になりたくない。

学校現場の厳しさを思うと、自信がない。

Q 「ひどい職場で」と、ギャップとして労働をとらえているようだが。

A 学生のKさん 雇用者の要求を認めることが出来なくてバイトを止めたことがある。大人として意味のある人間に成りたいと思っている。展望を描いて生きて行きたい。

Q 奨学金の返済については？

A 学生のKさん 500万円ある。

雨宮さんの発言：昨年のデモに参加していた学生に、奨学金の返済額を尋ねたところ、「900万円」「700万円」「1千万円」と、続々答えが返ってきた。現在、大学進学率は同世代の2分の1、その内、2分の1の人が奨学金を借りている。日本の奨学金はほとんどが貸与型で、諸外国のように給与型が整備されていない。教育が「自己責任」となっていて、学費負担が突出して多い。高額の返済金を返すめどが立たない人が増えている。返済が滞るとブラック

リストに載る。奨学金を貸す機関は、金融機関になっている。返せない女学生に風俗求人チラシを渡すこともある。人間関係が大事で、「ひどい上司が3人いると、人は死ぬ」と言われている。

Q 「どんなビジョンを持っていますか？」

A 埼玉在住の学生さん 探している。国内で、自分で環境を作りたい

○参加者のフリー発言

学生Aさん：奨学金の返せる条件で、仕事に就く先が左右されている。

雨宮さん：ゲームの仕事として、嘘を平気でつく人がいる。悪質なりフォーム業者とか。アンテナを直すふりして、屋根に自分で大穴を空け、契約を迫る。また、「頭が良くなる音楽です」と言つて、テープを売りつける業者もいる。

Yさん：悪いことと知りながら、ゲームののりで、遣伝子組み替えの仕事を進める。

大学院生のOさん：剣道を教えてくれた先生の姿を見て、こんな先生はいいなと思った。自分のやりたいことの特徴を出すことで教師の仕事がやれたらと思うが、そのようにうまく行くとはい限らない現実がある。

雨宮さん：高円寺や香港、アジアへの展開を考えたらどう。韓国のある人は、徴兵制を忌避して、フランスに亡命した。ナシヨナリズムで対立を煽られている面があるが、色んな国の人々と交流し、悪しきグローバルズムに対抗する「世界の貧乏人の連帯」を広げよう。実際35か国で、反グローバルズムの運動がなされている。

元医療労働者：職場に電子カルテが導入されたが、それを構築して、月10時間程度の残業時間に落とすことが出来た。経営者と労働者が一致できる課題。労働者が持っている「残業代で生活できている」の意識を無くすことが大変だった。楽しく仕事をしてきたかといえ、そうではなく苦しかったが。

私立高校の先生：雨宮さんの話を聞くのは今回で2回目。私の勤めている高校での話。最近、3人の女子が中退を申し出た。3人に共通することは、県立の受験を失敗して私学の当校に来たこと。また、2人が母子家庭。大学に進学したいが家庭に負担を掛けたくない。「私学に入ることは、親不孝だ」との考えを持っている。「休学扱いにしないか」と説得した。壇上の皆さんこそ先生になって、子どもを救って欲しい。子どもの気持ちがかかる人たちだから。

雨宮さん：自己肯定感を高めるには、「無条件の存在の肯定」が必要。これは、以前は自然に有った。しかし、だんだん限定が付くようになり、ついには無くなった。「自分と他人を比べて身の程を知れ」になってしまった。

Yさん：その言葉は、新自由主義の評価だ。全ての親が「無条件の存在の肯定」の気持ちを持ってば、家庭が変わる。しかし、「自分と他人を比べて身の程を知れ」の考えが、家庭に侵入してきている。

学生のーさん：生活保護の不正受給に始まるパッシングに憤りを感じた。今日のシンポジウムで、スローガン「無条件の存在の肯定」を見付けることが出来た。

看護師の教育実習をした学生さん：奨学金を返すことが出来る条件の仕事に就くために看護師を目指している。本当は、お菓子職人を目指したい気持ちがあるのだが。

退職した元教師：学生の時、生協の仕事のお手伝いをした。「一人は万人のために、万人は一人のために」の言葉が自分の生き方にびったりしていた。就職差別があり、「卵の会」を組織して、差別と闘った。丁度その頃、非正規労働者の「講師裁判闘争」が闘われていた時代だった。

雨宮さん：非正規労働者の実態について、自分の経験を通して欲しい。また、女性差別のことなども。困ったときには助けを求める方が良くいことも。生活保護

の受給の手伝いをすることを装って、実は貧困ビジネスの「タコ部屋」経営者の手先だったりして。J K産業の隆盛は、日本の貧困に繋がっていることも危ない状況になっている。怒ることに自己肯定感がある。

閉会のあいさつ

学校は子どもたちの人格の形成の場であり、家庭の次に大事だ。それなのに、非正規とか差別のある世界になっている。差別など教えてはいけないことなのに。この解決策はないものかとずっと考えてきた。やはり、教育こそが、解決する原点だと思う。学校の中だけでなく、社会全体にある教育。時間がかかると思うが、生きづらい世の中を変える教育をして欲しい。

(資料) 雨宮処凛著書紹介

- ・『生き地獄天国』(太田出版)
- ・『生きさせろ! — 難民化する若者たち』(太田出版)
- ・『雨宮処凛の闘争ダイアリー』(集英社)
- ・『フレカリアートの憂鬱』(講談社)
- ・『パンギャル ア ゴーゴー』(講談社)

- ・『14歳からの原発問題』(河出書房新社)
- ・『14歳からわかる生活保護』(河出書房新社)
- ・『14歳からわかる生命倫理』(河出書房新社)
- ・ドキュメント雨宮☆革命』(創出版)
- ・『命が踏みにじられる国で、声を上げ続けるといこう』(創出版)

・『小心者の幸福論』(ポプラ社)

・『何もない旅 何もしない旅』(光文社文庫)

・『排除の空気に唾を吐け』(講談社新書)

『バカだけど社会のことを考えてみた』(青土社)

など多数。

・雨宮処凛・小森陽一共著

・『生きさせる思想—記憶の解析、生存の肯定』(新日本出版社)

(文責・小東由男)